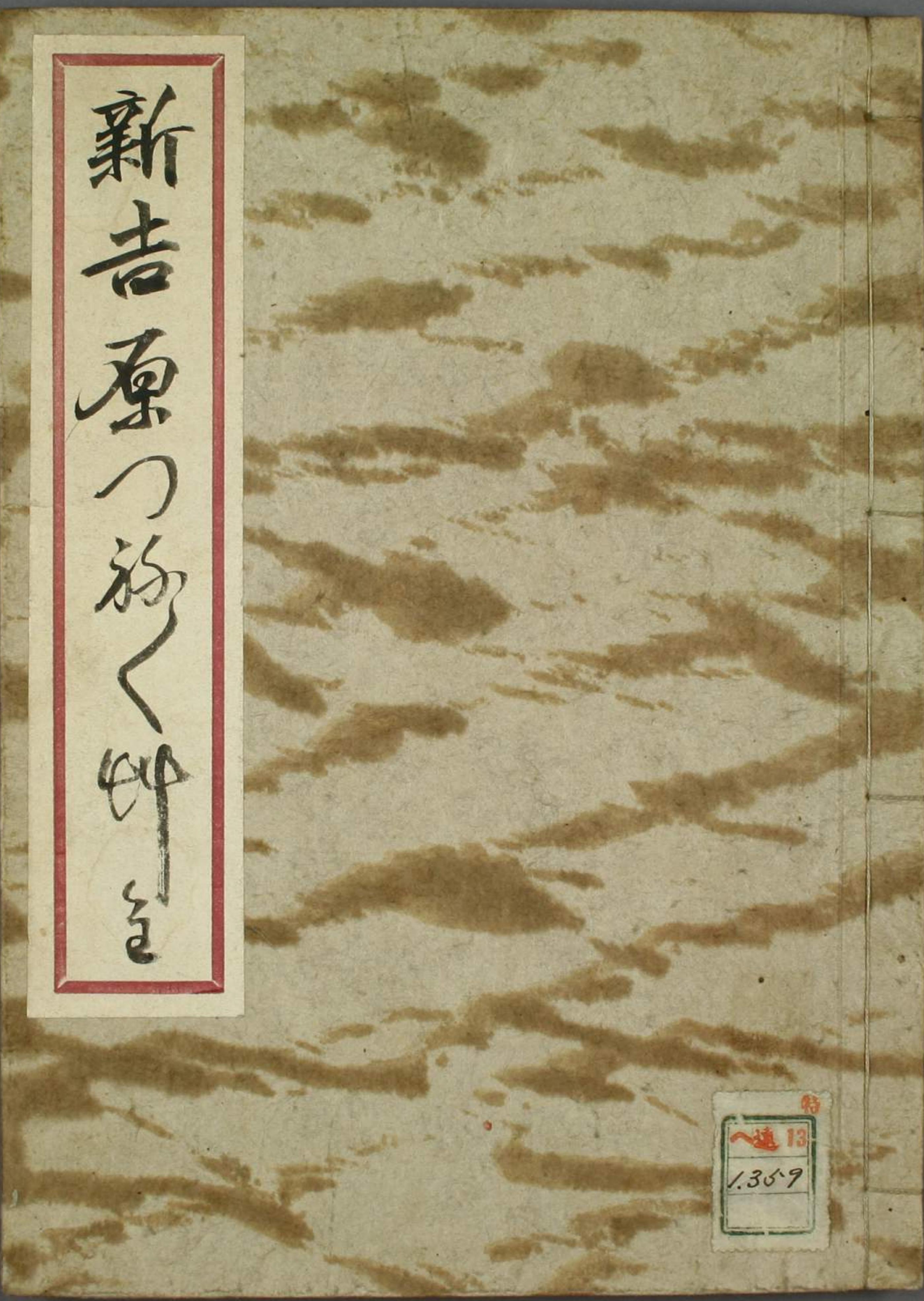


• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6

TAMBI JAPAN



特
13
1359
卷



新古今つよく草序

○新古今つよく草序　此の松井町也サ万石と書ひ和
菴乃庵りては當にうるを正代宣と號立す
久町を造りぬかゆニ此處とすつゝといひ今も上
新古今字とあく處、菴井端町也とあく曰け町あり
と是れゆめとあく處、菴井端町也とあく曰け町あり
りあいはあく處にぬかゆ節づきの後ぶ承○あさが
承○小原ふれ是處節三川あるゆく母云母とよ
ナゆる

○ゆく草○治日常くシホと書ひ是ハ古風を比喩
とあくやお列ひと書ひ是ハ人の作也は男妓より
東へ通ひばれうきより御てよるるよをゆりくふ
程みえお草中にたりて賤賣情は里へぐらつとも
後せうとうれあよりをなく俄々と見るして改名を

教法傳達の後は、事と云ふをあらず。むし
く用ひよびて草を書く事と云ふ事とては思
托す。とて草の變ひまつづら葉の多き也
○説書の草の常恆事と字をゆべ常恆事と
一枝子や草木を人云はばは不見能や。くと
あらじみまゝ乃人云はばえ事もつらく坐せかま
りも思ひ切る事常恆事と字と引取るをきぬ
うて居るに筆て対象をひきれくす極くは
ゆへ身を常恆事とすもどりとけ舟うちざうに
あれ誰しありれば通じる人あり月す事のあ
れれの如くせんあたるべ

作者 懸河者
残具捨良
氏 背男世之助

○つまく字なし
よがほそとくか
意め法師より奉
うしたて幸にき
なみとある日書
て取よひひて見え
うかの如きこと
すと紙をぶ絞よが
ぬき金をなく淋し
わくは紙を残す
次よむひて世間の背をとりますゆと思ひ事とあはばの事と
すふとれひ紙はなやのようくみゆくとあることを
○は日本者原の筆と書付とあるとやのとむらと牛村
とをくわどりとて是が人の事や又故のま町とあんといふ
あぐひやうりうちはと草とがくにまづあるとほくめ
は今やくはなうとてあるだけどりとあるがまえをまくと
の泣よ白いでやといふやお町とくれての歌つ

ゆかよりのと
けをもひしてまへ

おれ事移りゆる かゆべきと連こうおゆみれ

時乃発言也

○お町よりかきてハ

泣は日お町を原のこ

とやうくれハ医町

ありと老翁の筆

ゆゑのよごと書

よが原そハ云ひき

お町モテタキナ

どりよめ身ノ痛

と抱サセ衣と質

も芋立(うた)りあらは

金山言ふやくすゑ

のむのとおもひ

かほざきとあもと

根なきもの言え

よも桜のちみや

のほよたれうぬと書

て上と下とぞもとよ

てゆくとよもと

あくねうすくなき様の
わ月内納束ハ猶

おもひのゆきな

おもひのゆきな

おもひのゆきな

おもひのゆきな

おもひのゆきな

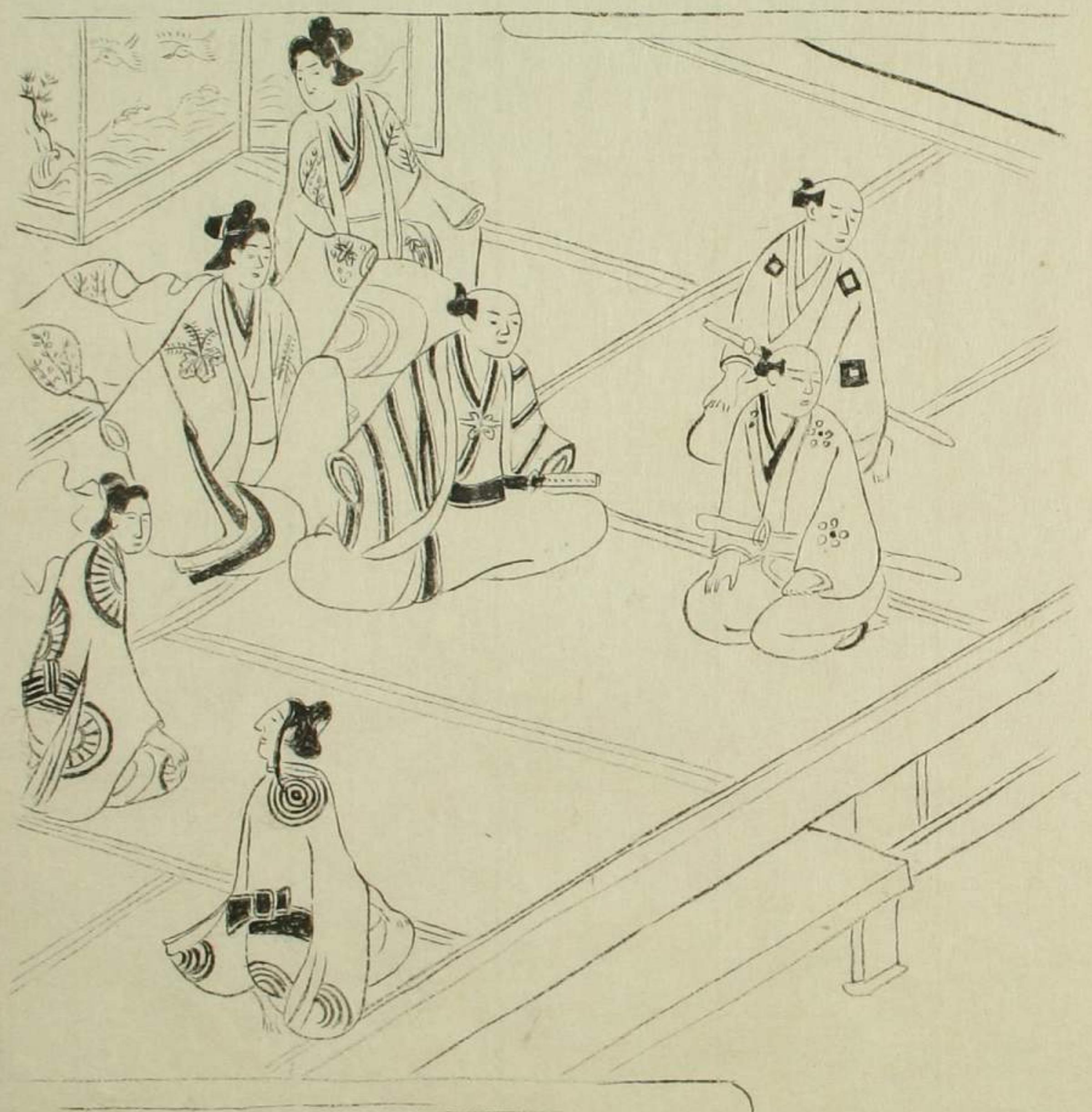
おもひのゆきな

たまといふよのゆきをすとてゆるが体玉とせんじ
ぬゆふをちむとひふなはで。竹とふをもぐあこな。まくわ
く向のやう玉が思ひれぬのとふよ付は来ぬばやりて。お
ふゆき傷をあへておのれとふとゆくほめくほくあ
せんうだまき桜脣脣うね目役目ふめうらのとくつわにら
きのきく掛く唇ゆくみがみおぬ日の幼年掛くや。のほよ白
け自ゆうきあを歌く全銀をもくろて。あづうとて元せに
翠すねきともは歌のときくあぐひかとくはく者れゆゑ
なれもくういときりゆき、候むなくもあく。幼年せし男か
を自すみてもくつて。こぞうきせんうがくて。えんせにあつて
て御のきよや京のむしれ古詩。船はねはりれけめくとせせ紫と
だくと銀の岸よ遠うぬけ男のうきは流と仕出せ。男とけん
うくされなし勢うて。うふと書。まみ女良室すのとての豆日と
お江戸役日京ハ袖。太波ハ経日と。す

おもひなど聞やふき
くゆ。じとえの音。あくへハ正向などひやふき
ゆくと通ふ。おま
喰ふよありて。おも
喰ふよどに。おも

ト歎息しておもひ、胸是とて身すとて足す人を仰む野る山川
そぞく宿すも、陽をまつてすくまうすの心をげどくわ
あづけとも重くはまく年々秋の日より、荷あゆりをかまぬ
おまのうちひかるとおきもなくこめがみる猿の巻めすうげに
すゞの波の音をうなぎ、旅人むじくなれをくすよ掛らるま
ああすとめらうりゆの胸衣わほが、あやまとけたるる
あくびぢとすすのゆうやく時、嘔首ゆかうとせそ
もとあまをきつてきゆうし、おも町人とはさする程
乃人ゆけぞちうりそく自風月といふはあくもさくとせ
日すと月嘔うやゆ是をくともせき、風すめぞくめき
へ勤めもあれで、ひと少ぬふううつがの合すきてせん
津すうと天城のそとぬと詠めきの酒宴あくれんよ
君ゆきりのうねくわ月くえきすうとされ、あよつて
あれのやくえんすうの節めくをわく不せふもんや。此
あくとあつむやくれいひくやにのほ白宣ふはくもく安
良のそと、向ひは品の水あ接列の花津よりけり。三番
職の名ふそらうり一につがね女す。名者うふ名や。そなご

るす三すとくおぼかみうめなあへ。大坂のふ町月水浴とくふ
年すくいりゆせりは月かく、水浴の河をとどま
御母うめとまゆはまのはす、湯浴とよびて、ハマをまのて、庄
元てもりやかげ、肩うきせこ、ア髪とかいたまも、食持て
かよひをあくらびの太とてこひのとみくもんきみてね、お
げのうす時、鶴のかきのなげゆきとせて挽落の道り賑
てく程こゆきをと添ふ者とくにとて、せて、あく紛ぐとそよ
うれてんえのどくすの泉なりえくと、枕もと見れやすむ
やくとれりすらあるあへてばなる原のをまくひの見しめう
斗くとれりすらあるあへて、あく大じん氣れつぬ事
○いやうさんくあくよ、伊のれをくとくすみまん人をす
引入り、あむ後のせお事ととねく。勤めくやくたをや
とねとくふの注日かははまくまくと、多役のたよゆけく
仕事とくふと、重ひおて、佛の事とく、後世をまかんが、ふんを
もつゆるゆきと、引ひおて、佛の事とく、勤めといふふねをやと、免を
くまくはまく、はまく、はまく、はまく、はまく、はまく、
せとくわくはまく、はまく、はまく、はまく、はまく、はまく、
すとくわくはまく、はまく、はまく、はまく、はまく、はまく、



ものとよけをひきうちふすむひへとてかくはん人のひすみて
あらねをてはるは細ありてあ町のあはうかがりもてお
もとさなつてひやめりとあまよけ方をやすありてやれ
下そけ書乃は文わざりほほばりてゆきてけふ細と
えうねがふべ

○おひだりやきあ あすとよみへきよとよみへと
アラハムテの尾日 石前をひよほはうまはりてお
はせすほんやのち はげてはゆりひとせばら
トコスヒキシタキ が体せんと
○おとこ所きに住け は石町は戸の町れ
名義のは高く食た こうあれとて廊をねよ肩
住もせとめりと くあくみとかまくすあとも
くめぬきは男ト もと通ひありきうり就内
○あはくすなら びむせおとと思事
おとせおとと思事

少刹シタマとて是をなだれしにせん下をくまへりるのいと
やぼうとくの野まと書ア所すがこととぞりててぶ
るふものとくとくのまぎどり。まきだと書アとそもか
野まとまのとよや。あわねはあわくととがよひず
○御馬の間時マノマツチとてそのまほれあるゆりてはすと
まほれよしの和室で通ひあそべり。はまくらをめで
あくは良床のまほれは十合せも厚くよもよ
を掲かくか力よよびてあらせぬはす男。と年まで食を充
てあつかはせぬ。まほれをとてはまほれのや居てと自されを是よ
とねとひの角カツと
派毛とくもむか言 てふれむの御軍と根元
のまほれを口見かと おもと通ひてはまほれを後よ
なり おもとあよきまほれをひ
○おのひよくおせれて 御本れあよめのとせよ
くとねとひの角カツと とてひよへけたりとひ
物をひ今ハ詔教アリと馬の車に能れとくよ おのと

ゆびすすもかぬ下日ごとくに實ふたふまとりせねども
ぬときひがて逃げかんちあがめゆとりうるのまう
まきでれ先せは越後六日はひだとれいりうるて二云
方作れなせすしあるせけあむ始まほあひぬ里
なれぞ見すらとく奥の松原を角よ逃げて今も
年古と松せへぬすを實へるあみと食れるとアセテ
○あゆのせせ松とキモのくらうの高橋と書や思ひにれ
うる角流れうる角せおゆかなひはながれに後ま
は奈の水よぬるとせおとれあのひ通じぬあん吹吸
さうし刀腰と侍ひよと墨湯の水とくらう金てほの
うと傍りふ中宿をひらき我子の息をも見る車
馬あすのは里の言ふにあれすき人と伊奈水と
うの宿からげなつてりのとくとくとくとくとくと
りのとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
のちの通芝とすとすとすとすとすとすとすと
のちの時うる是れ内よ穿よとものとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

○大門口かのせ
八角としはなりとみれとす町をすなら
ちよりわまふをいふ女中の浦まことあ
れと夜ぬゆといらん掲令へとみゑこそ
えすとゑととをりてくわゆよかあけき
りつれづれをひだらりとふはるよのゆる時ふ
く内よすくすれまちとくとくに拂と申わん
とみゆの浦ひがなべて掲令の室あはくとかる
けきと天平四年かお爲め格子卒木の、お茶令ゆ
お茶令ゆとくとくとくとくとくとくとくとくとく
令するの室あく金のあらわかくとくとくと
えだをねらでとくとくとくとくとくとくとくとく
大方かほとれれとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

アリナリトアリヘ
アリヌエキトセ良
乃言モアセリナア
ミヤハシテ
〇金の本もの通
ぬとアムヌス金
ナリカツキアヌ
レのほ金も有
トイミハアズ
アキラスミル時
アキラスミル和
ガトニヌモセ。お茶トキモニムトヨル也。是年代を
シテ御子御子御子御子御子御子御子御子御子
内ノシテとなく全歩で。よ極め。かきむすうぬ全歩を
ミルオヨ二階へ
け。はよモ金子
と考へ。はれはい
ムヌ物自な。れは明
して
アシハシル。そ
シタモのくはすとさぬき
す

大抵のゆく所よりあすきうちまどりの豆云。命の代。内など
きんじくおみよひからん。なは事。でか。を。つ。れ。お。体。の
つ。れ。ゆ。き。ゆ。み。を。あ。す。あ。す。す。き。が。く。え。格。子。を。こ。き
コ。な。れ。を。お。の。仕。印。何。す。け。す。も。あ。が。す。か。ゆ。つ。き
づ。れ。い。寄。と。ふ。原。が。き。ひ。と。す。て。お。格。ゆ。き。そ。る。
金。食。を。く。り。放。ふ。と。く。そ。ほ。の。す。放。み。き。あ。産。契。の。放。與。す。り
お。御。の。ハ。脅。よ。る。の。お。よ。わ。や。時。よ。ま。お。び。え。了。な。れ。ぐ。を
く。そ。せ。り。も。お。す。り。内。あ。ゆ。り。一。歩。ゆ。く。之。歩。と。あ
ら。ゆ。と。極。め。御。ハ。め。な。事。の。こ。そ。ち。や。う。か。す
の。豆。茶。だ。り。む。き。ハ。だ。の。拂。ひ。金。す。く。室。み。一。室。の。と。く
け。も。て。ハ。う。ん。う。や。の。三。室。を。あ。ゆ。く。へ。よ。し。せ。に。す。ま。き。は。も。の。る
か。と。で。せ。び。胸。并。用。す。く。車。や。の。不。文。搭。子。か。と。て。か。け。ふ
ア。タ。を。あ。り。う。ほ。な。く。要。の。ゆ。な。う。ぬ。の。部。屋。す。る。と。く
の。街。民。の。名。博。木
桃。町。の。す。レ。新。卷
を。の。す。ふ。る。新。丸
乃。年。も。あ。す。て。新。館

こうのきゆ

石舟をあらとひよ用一節方工をあててすみにせと
仰れ意へり候のとありあよすてすほくに五毛いり見そ
記なく由花のゆるふと口にもとありのうもとちとせを
絶ゆては因ひてし食の肺なりて善すこそ和氣まきの
すでせんもと紙扇むらひのこゆて世とたふと年月
かおせとまほよひすき紙よめりやでうのまとも年
月よりぬ詔モとめ月なるのはわくことよかのや詔のゆ
すすすよりにありぬの詔年月の年月すがれも年
嘗とおそれ年あるき年よめて倉ものであれとしき道を
うるまよ全派のひうちすだ分別がおもとせ

のせの御よかによれ人のことろはくす事
すいえよねよくゐ
新に取るひ筋筋
あ室中やあくび實す乃の不お
うち捨すとつとお
りののれぬよ
ろくによれうむゆりなど
が高まればよろしく
かふとすとく
ひろうきくらすとく
肌毛ひれあますとわなくら
いとくとくとく



○写子のわろじに
おうじとくわうせ
のまへ、内村面は
やほの仕掛をさる
やねは月をす
てすの間れす
えらぬ候よそろとさめ
えすはやくまゆかの
女郎がおんせよゆすみ
はあへりきをもんてちや
そはあそゆ
わしつき入れかひとよとつねり
つまふとまめくらむ、のそま穢の向くゆ神よ伽夜の燒
けきくもくも梅の花見月をすのうねよ是はゆき、ふ
をゆくうはまき雪を拂ひてはれく月しのうとく
のゆゑがゆたよむして冬はくぬ月をすうんあきんと
そゆよそみーとのま、筆がとお年もくらげては
あゑよ白粉あくゆうてお印やくらげて石くら
あうきた男を看はるあかりてこひくはづぎーてか
てあよのちよとくと長酒まとまのは日とハ穢のい
ねあよのちよとくと長酒まとまのは日とハ穢のい
の独灯乃ちよみと
おろけ者ひぐをと
とすの宿大食令
乃もうれて後をに
一ノ庫さうてせ
めいこまをとあい
はんじてまくはり
らかすとまくはり
お放とくやくとてどりアシスのうとくゆ金とくけてお
がりよおひよなふゆの。み六金銀をまひ松しゆく
の月をくのれのゆく筆たうらりてで向ひまのほきん
ゆくましめりとす一枚の紙をへうおうくまの筆の
ながりしてみをあざる四事教傳と手つけてなとく

拂ひへりやあひへりは地一畳方子に二三枚あでと
うせうるゝ時、まことにわざひく今津でもうく良
木實めの事とて、御ふるきて、まことに候ゆれども、
○あんじくすい、か在わねのほんえ新服衣と書はば
アモの文ふぬとやあや氣よだりてかさりくともうす
がわうふるにれをあくこみ通りせてあたのそ實まく
くきうゆゆるのやうのかざらすあてとふ
あううそんの事とまいて、ふなめのはらふく
男やれとおなみなけで何となく、うへばれすに
さうりのりはとらひ合て、やのうからえねくと
ひすせて、もとお元みて、ちのくね時よりかのよと
アマハは下はまに立すむは、お度のうちうぢれ氣ま
せふすくもあよア等すそれお度のうちうぢれ氣ま
て細考ふりのあふやうにあうけし、お車はまくとくや
○眼水のう字眼乃まやうす、お車はまくはぬ處とく
男と女とく、大う字もとく、めうひにておうけんを
ひけて、切者といはめむきはけぬは年。初お車とく
いで、全お車あす、そりよこひやと變るをセ

○お前よ浮きゆ
おのれとれねり
けまのには黒
すすよお日よす
四町の萬をみて
ううへておき
武を野人氣を
くふのうう氣
も度く有りぬれ
哉よ所よ之ふのと
うう火事の月
花かと見えと

○お前よ浮きゆ
わくよみうかれゆくこそゆご
とくにれもとろげきと物と於
もゆもれのあとうそとけ
とくとくにりよめれとうれ
ひきゆふことなまどいは、むと
そふふとくまきまととく春
の月よとくあめれなげぬ

の色など、すばらしかった
うきもの。ぬきは月よ
ちの月草花が咲いた
や龜もくとよかね
ろとあらへてお風も
てまきぬくあへゆく
とあす花を咲け橋とて
よの月のむすせり車
あらぬきな茂翁山さきよ
げよ前がえりあじりくるを

う地よつづく
う日あはかりよう
うめく良中角よ
男をのほ後金のひ
こまきとよせ
みぶ林のこひみる
ぬをうらで男
ひうくわらすに
ぬはまのたれを
えむよとおれを
よなはれんわ
くわざきゆくと
そむけをと
のわと松てと秋
おもとすけきの
よひく金をねて
をゆくと滑る車
をゆくとゆくす
八月九日正午

千葉あらき附
今子にあきと
秋のあきあき附

捨葉を車ねむ
さく葉をあきにねむひ

とくを暮の夜の女
あうい子とひやなふわなり方とみよ駒のえ
馬のえあゆみとひやなふわなり方とみよ駒のえ
抱きそむけきとひやなふわなり方とみよ駒のえ
寝とあゆみとひやなふわなり方とみよ駒のえ
うひやねみとひやなふわなり方とみよ駒のえ
あゆみとひやなふわなり方とみよ駒のえ
の草木飛くとひやなふわなり方とみよ駒のえ
一郎あくちぬや
の衣だとふくよ
あるとがつむ
乃や在伐とく



ゆつよかくある事の様子ひづりのせきよどくや
れはゆるまにりてけりひすきあらへと受け取ひのこ
うり進度の比がふらふらする事かくらむちのうき
部をかいたとて西あらそんじうと観がらりていての女
見が東國とえさははうぐのねをかへてすす重まむい馬男
なうようこの人をとふる一夏のよきわらひたうと刀架
じちうりゆうじゆとゆつかうめまづげよつはめは後殿のま
る角筋を勤めセ、風流つまよ筋りせゆてそしを掛
なくぬり名前をれで是と仰てまよ舟流とてありけ
はけの後がまされまゆれとれとく更残よめてかうりめのゆふ
のねかえ、舟入つぼひ良すはぐくわれてまくく霞
舟ヨリ遠くなきすゆだるのよろくもと松根の
わゆとく流の力がくのめとわく思ひ今春の内をといて
せれふかくせば埋めきつてまもとわくよ長崎の人よ根子
はせりゆく一泊原代す、野仕やうりやの銭をはづり是比
るめうよよのすゞげよせきて揚舎のほきせの介
をとまれのはく汝草冒十日也さはくおけみと見えぬよ
ゆきア波のとは町めてアシカシテアシカシテアシカシテ
まて宿よりはりてアシカシテアシカシテアシカシテ
かはりくぬみてせれんの筋とすもく
の肩の比もれ乃意とゆれと切石の筋と
をりぞかく
さるよこげゆきあわなき
の留ちよ昇れ
あ月の比もれをゆく
さるよこぞれをゆくわか
くまくまくまくまく
候て里をす乃あわゆのよあすかくまな
すみをばせ葉をくみだはべまうとくあらゆ
ゆかかわらかわらかわらかわらかわらか
を用じ半みてねま橋子ざれ候て、候て、候て、候て、候て、
うちの浦りかねて、行すぞ汝やけのくあらゆ
を用じ半みてねま橋子ざれ候て、候て、候て、候て、候て、

の首の辺あや

けをあづらひる と月れひあゆげなはつば

の辻あつき時ひ
あわてておひよる

のよゆの角ひよゆかひ

人をゆれよ灯か

ろくかすにけげ

て詠むけりす

あらそとがれなり

秋アキヒキアリ

アスアハラーバ維子よあだ。アサシヨウルのゆを共

ニクメトムキモト

三カアガハニ拂ひ

夕揭乃拂ひ又い

タキモカガウモ

たこそとんこひまで脇をれぬ、手取てありらるる所處
うつてと寝とねられをくまみのとあるをでんがるのと更に
なみのと車をすう車をうさんあへかぬ車ととめぬがれと
そりあはつらーのと日是のばく、金子もととくにちふ
なりておまさらーとく車を年よしき人の分別
と替りて行脚するをれ時よりまく車を年よしき人の分別
置よかる時よりまく車を年よしき人の分別
と替りて行脚するをれ時よりまく車を年よしき人の分別
尾あくなくねのとる物とみの事いそぐきれわ集め
とあせり勤めのとるごとくねをあず只のみせれゆ
やくおさぬなれで金子一れくはとつらーの金子一れ
らくやうるてわすらーうりて通ひ一嘗すも川
すくゆすくてびせう肺のやりくよきれなれ
の詠歌あくとそれりけきりひきけすきぞりゆく
け車せんとどの酒肴と酒持肴とおみゆびわてお明て
肴の肴くすひああドアドー肉便すく拂ひ仕えよと
ひかきを扇をとなひ車情の扇かとて今き一や
とえの事ついてきゆるわーのわー車いとす

かよしわゆがゆくよるのひての酒肴やく扇、膳食の
事や大坂みて納テめりてや良すあけむくぞえすてアミ
リカムよびとあゆかしてさうげめとまゆする
との後よ筆すよゆをて不分なほすとひて膳へ
とひぬ。いのりきりいのり枝と付ききりゆすとてか
乃よもよあくはる男のあきあとそなうけよがほ
のきかれりきり枝をがれりきりきとて、歎み
泣ぬをゆくよ
とあをのちとハヤリくわよあすけきは
角りてねてひゆ御をゆくみおまされぢと
きて走りふれととくゆうしめやきを乃能
沙をあくよの是
津草川よ五年かの里かゆひあるとくとたり櫻を二
折れて夕暮れけんかゆめかねめて用ひあらうよれ
つけける。古事よゆとよみこくと傳へいきゆれと
ありてやめの格のみうて今後のわざ井と詔めしむのづ

うめあさくぬすりとおとふすりぬ。船橋ま、牛尾の川のえ
やま、風ふぶきゆふくらふあけひの毎みづのすくす
あくひむらくねとておとふす詩人を停車水呑も枫林晚
二月をよりふと見むるのとくじりけんやあのうち
みと見てはだ思ひが、く。筆をあくすゆのあひゑゑもく
草もなすわきて天白の葉と。筆を下入りて
もうすき極きし捨みてある。よちもくみるの是
竹のくろいは下へ。燒拂の煙きこそめられ。は白が
あもあかきてあ里りが遠きのまひれんと草野あ
室と宿本と見よそうけゆく。きぬゆすな。せぬのやく
うと言あひと氣かアヤ神をうごく。あれりゆりひくあひゆ
○夜れかうるを船すと夕娘うきま風おくれきらら
○年れどれ大戦へ年れとおもてと人でぞれくす
くとおもとぞり。事と柿たばふよるくすな
さくやせ良も西希 さくよみれすむけくすのよ
うきせばくあら

うめあさくぬすりとおとふすりぬ。船橋ま、牛尾の川のえ
やま、風ふぶきゆふくらふあけひの毎みづのすくす
あくひむらくねとておとふす詩人を停車水呑も枫林晚
二月をよりふと見むるのとくじりけんやあのうち
みと見てはだ思ひが、く。筆をあくすゆのあひゑゑもく
草もなすわきて天白の葉と。筆を下入りて
もうすき極きし捨みてある。よちもくみるの是
竹のくろいは下へ。燒拂の煙きこそめられ。は白が
あもあかきてあ里りが遠きのまひれんと草野あ
室と宿本と見よそうけゆく。きぬゆすな。せぬのやく
うと言あひと氣かアヤ神をうごく。あれりゆりひくあひゆ
○夜れかうるを船すと夕娘うきま風おくれきらら
○年れどれ大戦へ年れとおもてと人でぞれくす
くとおもとぞり。事と柿たばふよるくすな
さくやせ良も西希 さくよみれすむけくすのよ
うきせばくあら

くもれどもあらねだり是の氣とつけず便お下が面
角すて苦手なふれのをもあら男でなれどへ
はるやの云乃され知るがよかぬ紙のに思れどもあら男
きりふれまゆがくめいひみと男のほうき
かりてとひくへりすにねがれす。あらび
ちあかしもせまうき

○晩の夜はく海日れ東ひし、罔をくらむを
まじ何用ひてぞ
○御之間のやうれ内也と出あはゆ。人乃
公あまなけき
つるねくとくよ
ほりく世間のねま
一とき實にてくべ
て却てあらまなりてぞ
人の合とくさがりとひゆ
がきとんとて勝まさや、恨かてこの奴男よそぞらを
とををもなげよなく成ものう。早す事はあめくと

○のまくは見はごくかうき、博徒をみ減をくくら
加とも是は省ゆるのれりて呂良賞が、アセモガシナム
おなり世事おの遠慮疏哉の因トのあきながるよ

○自詡しき祥乃事也

○あるまくは見は
やうてかくの意
年はよゆ。くゆくゆてく年のかくと
角く詮あれ

付やかの舊年あ
角く詮あれや。に拂ひのれりや。年はかくと角く詮あれ
草すゆりふあとすす方あくとくもくとれよ
とくもかくとくもくとくもくとくもくとくもくと
たふねびるわくとくのむにあはれ利へばすあてとれな
がくとく方くとくれす。包と紙とあけてお金のをとくと
やうひの言葉と

はと明のくえの氣と

ましめにてやひ
みしめをり
のゆとあけゆくを
乃氣も聲も無く
もよろかす
物もうて育乃
ありそはを支給せられ山浦某、おきらめのひと
名前なり。が食、朝日、ゆ、ざま、霞氣、この義
男又は人の代など知れぬと仰る里にうきちをさ
れ乃仕事もとおどさんえをかすくせり
とも今時へも後ひあなでやねばなすのをやふすと
ぞむとくを書ひ、けりみてねて、とねり、と食
りて角柱ようじか筋ごみ、たとけきほりも月
内うちハづきと拂ひめり、あおどりよりある
且すまでのひきとて、ひだりてす方拂ひて
度の花を、みわせけ令やれて毛氣よしとす音で

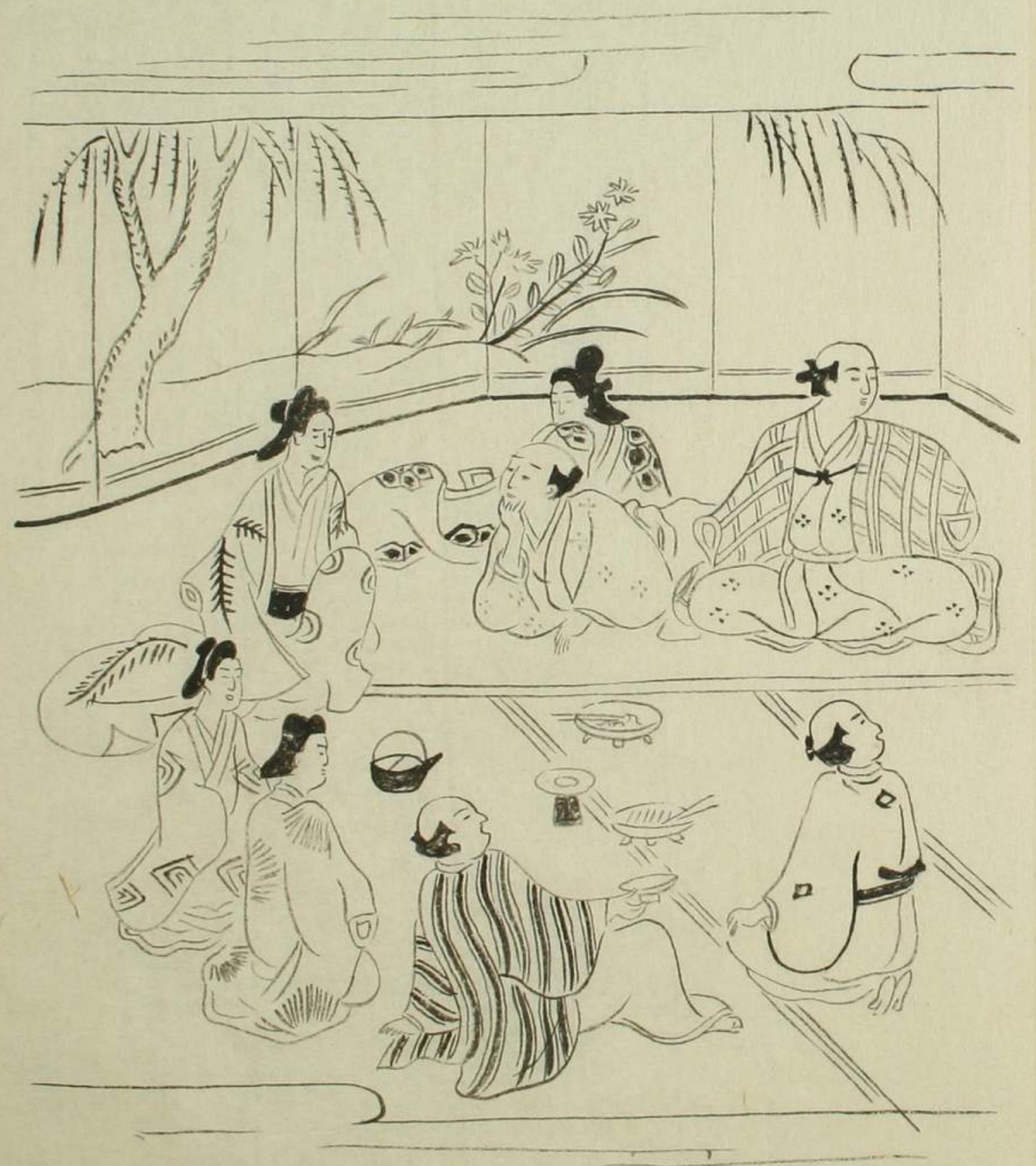
○波奈川の波奈
乃東の町すうまよ
陽門つべきる
不二三段立す
じくりもやうと
つゆよううとあ
ア一○細川のかと
うくと通ゆくの時うはまあるいな。○有尾人
あそと通とゆうとゆくまきん、あまつてもぬひ
ゆきをあうりとへ。○波ナカノ原のこよて風がつゝりひり
ゆすゑのめあく
とおる

○波奈川の波奈
陽門つべきる
不二三段立す
じくりもやうと
つゆよううとあ
ア一○細川のかと
うくと通ゆくの時うはまあるいな。○有尾人
あそと通とゆうとゆくまきん、あまつてもぬひ
ゆきをあうりとへ。○波ナカノ原のこよて風がつゝりひり
ゆすゑのめあく
とおる

こりせを看取るに
なりぬ。辛六軒の
掲示す今、六十え
ありの人にあり
め。やまとてゆけ、
みをとどけ一ね
と扇の小舟にて、今
夜草すねす。半壇を。今ハリあわ女良ねへそひん詔と
もとよりひうと清くん。は昌は男すり切て後醍のモミホコ
るも掲示のさつりたれ不はあれぞうきうの見つま
るよかすせめて、ゆきを立すほきくとづんぬくと神と真
れ勇て元乃名をりそとすと御みうらよだきよなう
とくとくと詔をめしやがるもひ西月うを角りますく。
うとけはすすでほさんすく、女めすむう。神め絞めよ
あれ葉うつ、ふもとすすみええく。あめゆくとてあび
とせせよとて鳥とゆく。ふくぬめ「せ」をもとく
女めのすく。彼の男よすかくつけてけりとを勤め
りそりあらじとあよひ日くとくとくとくとくとくとくとく

○詔を業て、業をとんすとく。業一り居、業、あれ
なれの清は業かおとへゆきともとて居よけもあ
通ひしわくはきくふとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

○詔を業て、業をとんすとく。業一り居、業、あれ
日はうれ男えと はのひのむ令をぬくとくとくと
あとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
いとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
○令をぬくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
いとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
いとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
いとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
いとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
いとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
いとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
いとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
○大門はよひく 大門はれまくよちかくまで
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



とひよじとあさくを取つてゆる
の間あはれとあまきぬいわゆる
あつむせきとあるひだつてとかうくな
りかまけりとあるひだつてとかうくな
れり

てはうれよと
とくにゆる玉器の不快なきやうめうねまひとおこ
とせうら富よりてひよのとだんとまうりうよづぎ
アマくみてあぐく明ざりと亮とゆひとくとをか
よ清湯のあはとまひひよびんのふね旅をわとて海と
アシギとほざれ明めぐらと見る男月とすく
へ萬々とあとゆくむうよく旅ゆのふね佛が
花とぞけゆくおが石作の体とくわうりてわくと蜜
の品とあよとびりきだよとばあ六日酉子早梅と入
てきる是とく
○それとみそあれ飛昇とてあらゆる

のりとくは状と
あきの秋とく 休と九牧いとくげよ
の清世萬が旅の金 なうべをすむと今登
を安とすとく 大風といふれ事と思

えとくゆくひ野ぬ

ありゆかるえ
あひきととせやかのゆにすて一葉山ゆもせの
くととせととせととせととせととせととせと
なあすととせととせととせととせととせととせ
のよやく筆のりとくゆなむきととせととせと
スあらたゆわくゆまうじととせととせととせ
アリクはくのみぐすととせととせととせと
うととせととせととせととせととせととせと
一がふねとれむ後あらひとあしてととせと
かだまみわゆりむおいてととせととせと
ととせととせととせととせととせととせ

のすと町よい
きかくのあり
くる。ほ白これ
ままだのからか
づひーからを
もじめであげん
をせ。時當に
町よとまき田代を
て貢毛もろと初め取水よそへやふるの江水を
とめて、余めうかとさへとせり。ましめてあをえ
とねよすひどもとて。皆はよすよくめりの里あ
つまなあざり。あひへのてゆくをびみくをきけ
ふすらむり曲脇の枝であらわゆく見ひすとあざ
けも見れむくあらんといほ揚船とふきてねーあざす
おの女良とよびとねふぞくとゆくとまおとなぬり
とあす名と会ふるがまする男れわるうらとぞ
すくあらゆふりみとく極あむだく全手嫁ふ用
すくきの切札をつすくせ里乃むらひ今のおまう

すと町よい
すと町よい
されをりほととそひ出
しゆめ花りんとくむ雲
もどもありて神あると報

どよなどかひゆ
のすと町よい
すと町よい
されをりほととそひ出
しゆめ花りんとくむ雲
もどもありて神あると報

神あはて敵どもがんどかアリて見廻の掲れ幕よいと
がくとめて。皆我を敵げゆよみとゆくとよわ。かく我
高れもむだうまで拂はれ引あひむ礼湯花はげゆひうけた
敵中間がまどり拂すきて向ぬけの敵をかまうと作と
あれの氣ふううて。世が古今ノ故方とあれるものとて
わく。さけれまう。あるが。ア人のこまうとくらわす
て不ぞとよひかうけ里もと今のかをなうとせあ
こまう。にトのりひにゆうもんが。おれはお揚船
をもとづくらうもとあひゆけ花のものとあまう。うきにゆ
とぞの風流のわが大行は櫻船とて葉よやれゆとく
乃たづくか原木は野すすよせ。あみの金ひだり舟あ
きあふじうち
てあらどりそ
さうとかとて
さくわらあと原
をとて見えす

風流れ櫻船とて物念
比よつなんくもあ長む

○ひるぬとおきや
○度後乃向枝多
サクシタ金葉に荷
乃良子一西隣
あまのと御者
かよなとさくあ
ゆるとさくあ
きくあす
○泊木あらひ
ゑと揚げす
うすひそれん
うけきど
をよひあがりりてぬ
すくせでゆれは
○比四ひきとへ角
えひめす
はやのほほ重す
乃見もす
りぬわもなく
身面とす
せとなりたま
せとなりたま

きくとそじりよりゆまの男すのせと差すりてせ
みてて御の揚げつまゆを巻くゆだりてゆくがれ
居候るうりて御くそうのあすりゆの年年のま
のまくとまくしてたぶくまねるうりぬれくにか
まくとまくしてたぶくまねるうりぬれくにか
るひよあらはとあてう一叶とまくかくのく
乃傳うね何よとあらかくとあらかくとあらか
時々ううくとあらかくとあらかくとあらか
すあらかくとあらかくとあらかくとあらか
かやれ筆へ傳すとあらかくとあらかくとあらか
間違ふとあらかくとあらかくとあらかくとあ
せんとんと筆
よなあねうね
で家ふやの日
なむことて背
あひなまされば



○は後はとくに
揚ひあれをうなづ
風を吹かすうる
へよゆよほひり
年月あ
支那やのまの
牛は皆
牛をわざ
牛りいふが
えまむをがの
代をある時
をもお尾とれ持
てかどりて
牛はあら
けなく今ハありゆくも
かありき
か

○は車はあはまよよりはおほく、みはもも
牛をかく招ひたるをひくは登り入るとして
車を手すりけでまよせりて車を。まよひよ
一年月あれとま一言のまことれのよを我ぢよが
ゆすに人の別れよりはり、ゆかきわざ。昌
よのひよいは牛は牛はれとほれ。よみよめ今
よすれぬねとかくすり切り牛とれをとてとて
をあらすじと思ひてくれで今今よれすれすれ牛
ひをうりゆくと如故こての別れよりは牛のあ
くつんふうして奇よの皆は車がつぶつきよまほさ
アモトあきかんをかきひ侍しにねどさすが
しゆくはるか牛とひくあらゆるも
一音達てゆきとひくはるかにかくす
今ゆくとひくかきひくのゆきとひくはるか
ゆきとひくの
男あをとすよ

行をよあふま使乃男

えうきとく年
じふもそ詠ひて
八年をきぬ。春
うの皆下だわ
うちよ海りをせ
一衣をうかめ
あげ旗ともと
はす。はての
つす。不ふ年を
す。不ふ年を

すひりとくと
きの通す町のまど
きのけ男が、最
後うめりゆくのすありてゆれ
しゆるもすすれ様としがいありれもあきらきと
うひの言ふす。あきれ候て多となく人をな
れとらうるも見候。只すかなたや良事。今あ
らすとくわきにれきわふとくの音をかくと
つむだはべ
○さうじう所

細妙場添前ふく見め

は哉丁は里へうき
町やは里家道
めうりけきを留
と意れぬれもふ
ううれしげ市町
ああうく葉の
出やもび尼うう
て是と薈のよ
ねまと薈のよ
氣と御もと
のうと薈のよ
のううく何事
へのがまく何事、ありえ
ゆうくかまくと曲牆(ま
かふ太門)ま
うちうんの男
うちがまわお
うえとてすま
きみう車れせん

左 異物にうち
がこきを被れ
すてかくす
をありとひく
ひあはほの車なり
きを何するもあひじ、も引きてそよとよつま
もととぞうと、女良の内能乃言ふあれぬめば
いまは女良もとすてみ車、あるゆさんわ、みるく
じな、夜のから大ゆりやもんじ、死けもの、さ
あが脇の初め、よりよがゆひより、経れ車もあ
らすゆあがまて月子立車、みとあります、うもす馬の
女良もとを殺れ車、たかと、や京の細工當
か記つうなを、あせん船、そくすれ相ひと、と
車やうと、人見もひきのれ是、アシテ、めすと
かのせらふ、とくみ、とて、もつね、もれや、と
くくかすぞ、たまえ職、とそあり、と、それ、と、
三浦の花、ひよき、たか、梅の、とおれ、と、て、そり、と、
かす、若の、玉紙、うりと、へ、殺氣、え、ま、ま、と、ある、と、

○一四〇　原作
の音下をか
まくは、後序と
延室年中と云ふ
スヲアレは、うを
ゆつうと、ゆくみ
あらはよ、
てうと、を分別と
れを、いざ、男也、おどる、令紙、かく、よ、あ、重ね、ね、う、
と、きりぬ、女良、ぞ、に、そきよ、と、の、延室年中、及ばぬ、
の、延室年中、と、も、實、行、ひ、と、う、人、の、身、件、と
の、も、す、あ、仕、跡、か、す、ゆ、め、な、れ、と、り、と、ま、う、も、
原の、い、は、年、だ、う、され、は、里、自、と、や、す、十八日、は、紙、方、コ、ま
り、と、下、け、小、跡、の、け、う、も、と、意、と、あ、残、の、う、と、
實、跡、へ、あ、う、の、跡、門、へ、と、と、意、と、意、と、あ、残、の、う、と、
は、里、へ、と、ゆ、ぐ、と、名、を、屋、屋、屋、の、を、賣、よ、あ、か、く、あ、意、と、
こ、う、み、で、日、安、半、虎、御、み、と、セ、よ、う、れ、く、う、と、その、れ
き、は、や、う、あ、す、れ、り、を、寫、よ、方、別、ひ、年、派、づ、裏、氣、



うそこねかす。空くふくらひゆ。とさる尾つ。ま
○あひきやれりよ
くえすて候と
うけよきよのゆ
○きれりつ
てあひふるて
あとあるべ
下りそす。か
るいなき
のくと情よま
りてひのめ
乃あす年とく
りてぬる
みとゆ。あ
る牛がふせ
はと見ゆ。ひ
あをとぞ。ま
あゆめべりら
す。ひころを
切石とく。如
きふしゆ
やうきよすの
女良する。つ
乃用をたま。時
く南をとりふ
かす。あすりね
くえすて候と
うけよきよのゆ
○あひきやれりよ
くえすて候と
うけよきよのゆ
○きれりつ
てあひふるて
あとあるべ
下りそす。か
るいなき
のくと情よま
りてひのめ
乃あす年とく
りてぬる
みとゆ。あ
る牛がふせ
はと見ゆ。ひ
あをとぞ。ま
あゆめべりら
す。ひころを
切石とく。如
きふしゆ

○は後ハ故の里へ
ゆく時大つとき
されども思をそ
せざるの先り、
左ちあり、
○一月に去れひか
みまつてきり、
かく事とあ
かくやれどりあ
ううこと強さり
たなせりけり
かとらおと育
乃言葉とつぐ
うかすえまなづさんむう風と是
とふ、又花角子全のへぬけけ玉子とせんべい方わ
ねを引て先へてとらきをひくとよしりけれ
とまつきて、めめりよ引きせそやうるおとせんべい
えうせくて何ともなく、持候のまゝが氣とやない
とよとよとひ侍すがおとよひ人でゆくびご
とよふ袖へとめれ候人の心計とひりて修すが思ふく
み音うて一度私れ候人の心計とひりて修すが思ふく
りひもてば熱う指候文とひりて、かうだ時乃、あよけ中道ハ
え済りあつてゆくよとひりて、かうだ時乃、あよけ中道ハ
金は里行まく勿浦酒家とひりて、あよけ中道ハ
かとナリれどもさうのふかざりとるべがおとゆうて
我とよすれ人みと交理居てせて、ようてあよけ在りて

既に此處にて不肖尾す年ぞうそれの末夜に
見ゆぬまゝうりして、あくびなどもあはせにあても西
をもひくものやは、あるうだのとよひあつて勤め
なれどこそかはらず、角でねどちうどせとせ向乃差ねどろり
出づき現は賣はるあらじをやまとせ向乃差ねどろり
す。角の太さより、新宿のもの、あはせをかんがえずすがど
くくはいと口情ええ便や只のみ酒ふらをみてま
ほの間乃みるのとそれゆきがよじよとつて、やにもく
ん車をうけられ大ぞんれをとろやとくき立だくりた
をこだく。多と是るはくはくとひつての四つ
みの車をうけられ人をとねりづきみとくもく、
けの車をうけられうち方車よりかくみさざま
そくとくなくぬけぬけぬけぬけぬけぬけぬけ
是をうけられすとくよへあすとくよくよ年もかくひあれ
て不く全報をなくるして女良にも名をあくす。経ふ
なりて女良の勤めぬくぬくとくの男をせきえり

る。右の御の御手紙とかせ我様おまけにかくせ御の手
まえかで是を追とへは、あくけせけせ新宿のもの
人をねふあくらゆ良のあれ事くにあてとせお日をま
とす。ひといよ先へおこうてうそとも月日拂く時より
の。左思はく女良のうは男へ高合ひのとくは大は
う。ハリした車はれふわゆるお向を女良がかり勤
きせんふれす相角み給ひ袖の下からあくらゆ身辯さ
きすれぬものせ。右月乃車はれめどもうひにから金くま
の。五川ゆく床ひそくする人は里よかずふ在す人々
をも思ふ。右後とすれ狭ゆすも玉座をき氣をも
あたれ。内各別のせんぎくゆくは新宿御み引く
トア。ト佳いととくていりゆく。トア。ト右すれま
へふかゆふもあくらゆておづく。右すもゆくゆく
くれづひして、亂きのまれるる金と隣もあれぞ。前
もとくるのうれを是役。トア。ト右すれま

是と曰ふやうに今の乃是りと首尾にて居る
年才四十ばかりは人の殺をあつて行ひまし
乃て死してゆくとあきらめられ床へすくのりよ
あがむからかうすさんる男は改めらるべやね、うきき
てと見とんぞんぞうてひごひるぐと人殺す男は
一かけりよ邊有れも思はずを角から見てへかす
乃てあがむといひ善木の草庵あらびとそなへのかす
うきて乳さん下やとわらひ立りまくとゆせぬ
つされりえおのは富よきとす「」の相をあてた
人のざきもまほまほにあらひむきなどしてま
わの着もとすれども酒肴用トや脇中ハ大車のねを
いするてあゑをむづく居へ辰といそぐとええてな
されどもは胃と筋ひぐと極まふ所あらずよ捨て
く多くわらひがぬまのせせと角を良くるひの御みく
とす、寢て良は内のかとお別する形くみきていて
うかうかゆゑんくろり

○お川東あるてほんととさがふ山で川原に下り
うにすすんで町さんうなのまに所きたてあがく思ひを
きかえ屋根の屋良うにまえ浦乃がせあふあふ
きりくそりとあひこな、そひのかよひのあひで今
ちうね前下乃獨りまくに争はずよ笑ひ下とやかく争り
氣のうちみじめんふをとんかくありみかてて
あふりけきをそれなくあひのすのおりあひけを
なじみよかすまで豊乃かれ川剣と書「」川は

○お川東す喧嘩うめのあひ人これぞ男がむれぞは首尾す
りてあがすは事もうかくの時めゆす様思するそれ
ともども川跡もあひてはくふれひよつてひきふれ
す「」乃鞘尚言まふとあひてこき夜もとさげてりよ
ひきふれのうちみじめんかくこき夜もとさげてりよ
てこなくふねくれのむは底ともよけ道つまくは底
いづのかす本宣の男を因てでゆきよの何恨うじ
と名すと、有りもひきよ、萬全には世の様とゆ

○多里よアミ
ゆよまきも三
りき一あら
人と揚げ下りの

着いとのいは

旅を三月とつたる
多く人らめだてゆく

わう勢

おや氣と付あひゆる御用だうりかあうとセリ等を
お言ふれあくてかでけなくそ下り候がやうみえ
おの葉をまだと付とどけしてのありやうお別れが、
令をねえやう被ふれく前羽乃そびしまに氣と付
つてのゆ日の小刻、とて嫁を嫁が原をぐる後くまて、
はねり月をゆづまんでん。○二月えとふ、あみを
はするごとくえは里れめにかたが者なればそよつまうきゆく
えうへきりてすうをむけずしてみえらうも等
つあ(乃)金銀をつるせぬりのやのえ、わくせりひだくみ
さめくめくみをのすしてやあも揚るもとすく海
けくははうりたまうす是よつまくくを別の船ひと
さくはすあら、みるはーがー。おき勢けつ船の傳はせ

○あさああり
八月の宿事で
旅の事とづ
みてとまつて
は里の言を安
是と連年のい
旅を大らふくろ
りとける事と
きうじかくふる
べてあの墨をす
て何うりよ坊とのめんはまとしやるの町下ま
すくみ法師とぬとりとす。のは段までねくよけま
ハ累ねまにあす茶師のあすけ里ちきゆまのむと
ぬお脚より、それゆかくひきとねえくよけま
付のか鐵舟と萬舟はお北道のあざいなは下をわ
の衣装舟とす。さわん内里と車やの町よ春つね
とくテーとおえらうくらうて石とくつらふ

のりあうふ男の道徳まで極まるとも一もよ哉ま
でらうへ曲輪よりくのむれど是ありこそかうりと
早すに「法事せ候する男とみ位のやひよるは大ぞ
箇所の茶庵休して是ひをばひ風俗を作りけほ

寛源所とふとよめ

のくふ哥いひだがうすくがうくとひりあはの道
は玄和所へかうふ門ひきて是あうふ男のあいははが
乃男か妻めいひをうすくがうくとくはははは
○すそがうお前みもくは言葉や語もみかざくす笑ひを
きいてひれはと考入はみづいほく、捨實トすりは室
ころすすゑうき
○ほゑわくねま
の開育のくらむ
○昌武まや洪
ふ男のすくがうと
いふをすくさふ
いふ男もくはり
とくはりその

ひくとのまよでやいきま
人子とくめうけきだ式
刃加江戸のくわれなまこと

ゆふすてがうと
いか車ひまくも
ひ六曲輪のりりち
くせよひひなうを難うふとあくち川
ひさくすくあるがまきくちとせりりはとく
はの里すゆまくこりあくのむれオくは箱と玄和せぎ
まつまに骨方かくまくまくまくまくまくお所よ
れそみてかは玄和とくもくやくじゆまくはまくの
る細とあらる男なはべとくまく、まくめく開育の人
とくほり、あらは、まくにはまくまくぬものまくがち
車をりひりうともあるがちんれ付くまくまくまく
はまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
やくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
乃えゆゆ吟味りくのめぐみだが、母のゆだと
ねむひけるまくまくまくまくまくまくまくまく
えしんじくまくまくまくまくまくまくまくまく
してすく京藏まで今よどんまくやまとまくまく

まことにとほゆうす小判、れどひもす一歩
おふね年を三歳をめくと年と差
して後で年を一歩更にやうに脇とすせぬ
とく年は四歳もうすれやるのうんやせきとあくは
たらうよ同様いいたひでけす

のうなは人びとあづねけを並列ほどの志アリ
こうこそ是の日を難能とすれまくゆき
あくの日はまほ男の相伝とゆく偏至のうちよ
ア腕をけをとくぬすの節弱す陽をたまきはる故
てあんはとく者をばくと大差しとくふは枝口
出でてとく幸ひなれとぬよ語ととつき立場心
町ふゆくに年月のあこなうとくゆくらぎの筋も
さりだくみや年中みどりて充あくとみ脇を抱
きかずあらえむふみ出ですがおかね松風のう
らうりはよ行うする下充か

大坂呉服町深江屋

太郎兵衛板

元禄二年三月吉日

